



## B29が東京上空にくるまで

日本がアメリカ、イギリスなどを相手に、大戦争だいせんそうの火ぶたをきったのは一九四一（昭和一六）年一二月のことです。

それより前に、中国と戦争をしていましたが、当時の軍歌ぐんかの一節「どこまでつづくぬかるみぞ……」ではないけれど、ぬかるみつづきではたまらないとばかりに、戦火せんかを太平洋にまで広げたのです。

太平洋戦争がはじまったばかりの日本軍は、「勝った、勝った」のニュー

家も人も町も、なにもかも焼きつくし、人びとから戦争をする気力をなくさせるのを目的にした大空襲は、昭和二〇年三月一〇日が最初で、アメリカ軍の無差別爆撃の幕開けでした。



## 敵機が先か お産が先か

さて、はじめてお目にかかった武者さんの場合は、どんな体験だったのでしょうか。その時の聞き書きノートを開いてみることにします。

武者みよさんは、本所区堅川四ノ二の武者電機製作所社長・榮氏の妻で、一二人のお子さんがいました。

当時はどこの家も子だくさんでしたが、一二人とはおどろきで、ぼくの表情の変化に気づいたみよさんは、「そう、まるで保育園のようでしたよ」









化したのもあれば、半焼けはんやけのものもあり、そうかと思うと、衣服がこげたくらいで、今にも動き出しそうな死体もね。みんなホトケ様ですから、またいで通るわけにはいかないが、とうてい避けよきれるもんじゃなかった」

「……」

「しかし、なんといつても、もの凄すこかったのは、講堂こうどうですよ。ええ、何層なんそうもはっこつの白骨はっこつと黒焦げの死体が、天井てんじやうにまでとどかんばかりに、ぐわーんと盛り上がって、まだブスブスとくすぶっているじゃないですか。講堂は、正門の横に入口、後方に出口があつて、火に追われた人たちが、大荷物もろとも、入口からどーっとなだれこんだんでしょうな。しかるに後方の鉄扉てつひらは内開きなんですよ。内側から引いて、扉をあけるゆとりもなしに、人びとが殺到さつとうしたもんだから、最初の者は下積みしもづみのプレス状しやうになり、次々と折り重なって、